

「男、突っ走る！」

第68回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

鈴木	国枝	橋崎	大島	伊藤	國村	奥村	船倉	植野	田崎	木内
良江	佐代子	幸悟	理次	英沙	英作	裕司	篤志	雪奈	良樹	雅也
(68)	(57)	(47)	(51)	(32)	(51)	(23)	(22)	(22)	(22)	(22)
広告制作会社営業担当	市民映画プロデューサー	WEB会社社長	広告制作会社社長	まちづくり会社社長	若手起業家	元名古屋芸術専門学校学生	元名古屋芸術専門学校学生	元名古屋芸術専門学校学生	元中央高校生徒	『オフィスツリーイン』代表

1 『スタイル・タウン』・事務所

冊子の束を開ける國村——その様子を
見ている雅也、伊藤、大島、橋崎、国
枝、鈴川。

『ぷれいす 創刊号（Vol.1）』と書
かれている冊子が出ており、元気なシ
ニア女性の表紙が映っている。

國村「ついにできましたね、創刊号」

伊藤「皆さんのおかげで、ようやく創刊号完
成です。ありがとうございます」

大島「フリーペーパーっていうのは、ここか
らが大変で、いかに継続できるかなんだけ
どね」

鈴川「スポンサー獲得できるように、営業頑
張ります」

橋崎「早速、SNSに冊子が届いたのを投稿
しますね（とスマホで写真を撮る）」

国枝「後は配布先ですね。創刊準備号の置い
てある設置店に、私配布してきますよ」

國村「ありがとうございます。よろしくお願

いします」

橋崎「（雅也に）ねえ、木内君。せっかくだから、ホームページとSNSに載せる文章、考えてくれない？」

雅也「分かりました」

と、パソコンを立ち上げると、原稿を打ち始める。

国枝「私、配ってきますね。束もらっていきます（と冊子の束を持って出ていく）」

伊藤「（國村に）『ぷれいす』を知ってもらうために、何かPRできそうな場所ないですかね？」

國村「うーん、PRとなると、人が集まるどころに行ってPRするのが一番良いんだろうね。『ぷれいす』を見るターゲットのことを考えると、家族連れが集まりそうなところとか」

大島「それこそ、十一月の第三土曜日にこの商店街でやる歩行者天国で、何かやるか。俺と國村君は、当日運営スタッフで本部だ

ったり、会場のあちこち回らないといけな
いから、理沙ちゃんや木内君たちで対応し
てもらって」

國村「ああ、それなら良いかもしれないです
ね。あそこなら、お孫さんをつれたシニア
の方もちよくちよくいらつしやいますし」

大島「確かまだブースの余りあったな。テン
トの一個ぐらい置けるブースなら、多分何
とかなるだろ」

伊藤「大島さんのほうで、スペースの確保お
願いできませんか？」

大島「任せろ」

國村「大島さん、すいませんがよろしくお願
いします」

大島「（雅也と橋崎に）十一月の第三土曜日、
お二人とも都合どうですか？」

雅也「僕はOKです」

橋崎「僕も大丈夫です」

大島「あとは、国枝ちゃんだけだな。まあ、
このメンバーで何とか対応できるだろ」

鈴川「私もその日空いてますから、一緒に参加しますよ」

大島「おお、よっちゃん乗り気だね」

鈴川「当り前じゃないですか。そこでだって、もしかしたらスポンサーの候補になる人が見つかるかもしれないし、宣伝の場になるんですから。いざというときは、私がそのままスポンサー獲得に向けて交渉しても良いですけど」

雅也「良江さん、すごいですね」

鈴川「私は、この『ぷれいす』のターゲット層であるシニアかもしれないけど、まだまだ仕事だってできるんだから。七十歳舐めないですよ」

國村「そういえば、先日町内会長さんとお話する機会があったんですけど、その方『シニア』って言葉が好きじゃないって言っていました。何か年寄り臭くて嫌だって」

雅也「確かに、まだ気持ちとしては若くいようつて思うのに、『シニア』扱いされると

急に老けたように見られるのは、心外かもしれないですよね。（と橋崎に）今、掲載用の文章、メールで送りました。確認お願いします」

橋崎「ありがとうございます。（とメールを確認して）
うん、良いと思う」

雅也「更新お願いします」

2 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也がパソコンで編集作業をしている。

N 「『ぷれいす』が無事に創刊してホツとしたのも束の間、僕は地元のフリーペーパー『デイズ』発行に向けて、少しずつ準備を進めていた。『ぷれいす』とは違い、一人で発行に至るまでの準備もしなければいけならず、基本的に夜家にいる間に、冊子全体の構成を考え、そのデザインを制作し、日中はスポンサー営業のために方々を回ったり、SNSで常に情報を発信するという生活が何日も続いていた。個人事業にあり

がちなかもしれないが、もはや土日関係なく、そして労働時間など関係なく、仕事に追われる日々が続いていた。そして、十一月に入っただけのこと……」

3 居酒屋

雅也と良樹が食事をしながらビールを飲んでる。

雅也「ありがとう。わざわざ、誕生祝いなんかしてくれて」

良樹「良いんだよ。それに、木内何か最近忙しそうだしさ」

雅也「まあ、全部一人でやってるからね。そういえば、高校の時からそういうこと変わってないわ。結局全部自分でやっちゃうんだよね、誰かに振るのが苦手だし」

良樹「高校の時は、振るんじゃないかってそもそも誰もやらないのを木内が積極的に引き受けてやってただけだよ」

雅也「そうだったけ？ もう高校卒業して三年

以上も経っちゃったから、当時のことなんてもう忘れちゃってるかも」

良樹「安子ちゃん、どうしてるんだっけ？」

雅也「確か去年、別の高校に移ったはずだよ。うちらで面識のあった先生ってなると、西澤先生は確かまだいるみたいだし、あと茜先生は結婚したって聞いたし」

良樹「マジか」

雅也「うん、誰に聞いたんだっけな。あ、崇から聞いたんだ」

良樹「クラスの子、連絡誰かと取ってる？」

雅也「そういえば、最近全然取ってない。むしろ良樹が久しぶりだった。良樹はね、ほらかっちゃんとうちと大学同じだから連絡取ってるだろうし」

良樹「まあ学部も同じだからね。あと、康行とは連絡取ってるよ」

雅也「四人でまた集まらないといかんね。最後に四人で揃ったのって、確か成人式ときか」

良樹「そうなるね」

雅也「クラスのメンツ、成人式以来会ってないわ。連絡しなきゃだな」

良樹「忙しいと、そんな余裕もないだろ？」

雅也「まあね。どうしてもプライベートのことが後回しになっちゃって……。恥ずかしい話、良樹から今日の飲み会誘われなかったら、自分が今日で二十二歳の誕生日になるってこと、危うく忘れかけてたもん。来年の五月は、良樹の誕生日祝いであげるね。今日のお礼だと思って」

良樹「良いんだよ、俺のことは。ただ、今年で大学生活も終わりだろ。最後の一年は、就活しながらものんびりしようと思ってたんだ。そしたら、ふと木内最近どうしてるかなと思っさ」

雅也「声がかかるなんてありがたいわ。中一の時に知り合って、中三から高三の四年間は同じクラスでさ、気が付いたら良樹と知り合っでもうすぐ十年経つんだ」

良樹「早いね。俺たち年取ったね」

雅也「中学とか高校ってさ、卒業すると連絡取らなくなるのが多いじゃん。なのにさ、こんな風に誕生祝いしてもらって、一緒にお酒飲めるなんて、自分は幸せ者だと思ってる」

良樹「昔から、何かあると木内に頼ってたもんな」

雅也「特に高校なんて大変だったじゃん。みんな英語ノート貸してくれって言って」

良樹「そんなこともあったね」

雅也「専門学校入るとき、授業用ノートっていう概念がなくなるから、あの時みたいにノート貸してってやり取りがなくなって寂しいなと思ってたの。でも、二ヶ月もしたらそんな寂しさも忘れちゃってね」

良樹「専門学校のメンバーとは、今でもよく会ってるの？」

雅也「思えば卒業してから半年ちよいしか経ってないのに、もう三、四回は会ってるな」

良樹「集まりすぎだろ」

雅也「すぐに声がかかるんだもん。それに、俺は基本声がかかったら、どんな風に仕事の調整しても駆けつけちゃうタイプだから」

良樹「分かる気がするわ」

雅也「ゴールデンウィークに集まって、夏休みに集まって、その直後にも一緒に遊んだりして……頻度は多いね。多分、このままいけば年末にも集まりがあるだろうし」

良樹「飲みすぎるなよ」

雅也「はいはい」

良樹「もう一杯飲むか？」

雅也「飲むッ（とジョッキの余りを飲み干す）」

4 木内家・居間（数日後）

雅也が台所で昼ご飯を作っている――

スマホに着信がかかってくる。

雅也「（電話に出て）もしもし、おっくー？
どうしたの、元気？ え、来週の土曜日？

あ……えつとね、日中はちよつと厳しいん
だわ、仕事の予定入っちゃってる。あ、
夜？ 夜だったら、よっぽど大丈夫だと思
うんだけど。何かあった？ あ、そっか：
：次の日、ゆきちゃんの誕生日か。なるほ
ど、サプライズで男子制がスタンバイして
るってわけ？ そりゃ行くよ。でもあれだ
よね、サプライズってことは初めからいけ
なきやいけないよね。うん、何とかする。
さすがに夕方には終わると思うから。最悪
間に合わなかったら、諦めようかな。え、
諦めるなんてうっちゃらしくないって、ち
よつとおつくー言ってくれるじゃないのさ。
うわあ、あつぽんが京都からこっち帰って
くるのに、俺が参加しないわけにはいかな
いよね。オツケー、是が非でも間に合わせ
ます。分かってる、ゆきちゃんには秘密に
しとくよ。俺だってそんなへましないって。
じゃあ、あつぽんにもよろしく。はいはい、
じゃあね（と電話を切る）」

5 商店街・一角（数日後）

歩行者天国のイベントが開催され、次々と一般来場者が右往左往している。テントの下で、焼き芋を売っている雅也、伊藤、橋崎、国枝、鈴川——テールの横には、『ふれいす』の束が置かれている。

N 「それからまもなく、商店街で開催された歩行者天国のイベントで、『ふれいす』を宣伝するために、僕は国枝さんが用意してくれたサツマイモを焼き芋にして販売しました。来場者の人に、『ふれいす』のPRができる良い機会となりましたが、良江さんが期待するほどスポンサーの獲得には至ることができませんでした」

6 『スタイル・タウン』・事務所

テントなどの機材の後片付けをしている雅也、伊藤、橋崎、国枝、鈴川。

伊藤 「お疲れさまでした」

雅也 「意外と寒かったですね。やっぱり、もうそろそろ十二月となると、気温も低くなるんですね」

鈴川 「風邪には気を付けなよ」

雅也 「大丈夫です。運動神経は悪いですが、基礎体力はあるので」

国枝 「これで、少しは何か効果があれば良いんですけどね」

橋崎 「正直、ホームページのアクセス数はまだ微妙と言ったところですよ」

伊藤 「また編集会議で、どうするか考えないといけないですね」

鈴川 「秋号ってことで今回発行しましたけど、次もし冬号を発行するなら、すぐにでも準備しないと間に合いませんね。仮に今月から動き出したとしても、冬号を一月中に発行するスケジュールでいけば、年末までにはある程度のスポンサーや特集といった情報が揃ってないと」

雅也「フリーペーパーの大変なところですよ。ようやく一冊ができたと思っても、その次の一冊を準備しないといけないんですから」

鈴川「月刊誌の頃は、毎日毎日メ切に追われてたわ。大島さんだって、編集長として何十人もいる編集部メンバーを束ねることがどれだけ大変だったか」

橋崎「冬号のことは、また来週の編集会議で決ましよう」

伊藤「そうですね」

雅也「(時計を見て)あ、もうこんな時間：
：すいません、今日はどうしても夜予定があるのです、僕はこれで」

伊藤「良いですよ。もう片付けも終わりましたし、今日はこれで解散ってことで」

鈴川「そうですね」

国枝「では、また来週の編集会議で」

雅也「すいません。じゃあ、お先に失礼します(と飛び出していく)」

7 居酒屋（夜）

雅也が勢いよく入ってくると、周囲を見渡す――テーブル席で待機している

篤志と裕司が手を振って、

篤志「うっちー、こっちこっち」

裕司「こっちだよ！」

雅也、走ってテーブル席に滑り込んでくる。

雅也「良かった、間に合った……」

篤志「ギリギリだったな」

裕司「ゆきちちゃん、もうこっち向かってるっ

て」

篤志「あぶなー」

雅也「このタイミングで途中人身事故のせいで電車遅れちゃってね……余裕もって出てきたつもりだったんだけど……」

裕司「まあ、間に合って良かったよ」

雅也「あ、あつぽん。これ、先に渡しとく

（と鞆から封筒を出す）」

篤志「お、最新作？」

雅也「例のシニア向けフリーペーパー、創刊号がようやくできたの。今日も、そのPRのために商店街で焼き芋売ってたんだから」

裕司「何でもやるな、うちーは相変わらず」
雅也「何でもうちーですから」

裕司「さすがだな」

と、後輩や友人に連れられて、雪奈が入ってくる。

雪奈「（雅也たちを見て）あれ！？ 何でいるの？」

一同「ゆきちちゃん、お誕生日おめでとう！」

と、拍手で迎える。

裕司「依頼があったんだよ。ゆきちちゃんの誕生日祝いをするから、サプライズで一緒に参加してほしいって」

雪奈「そうだったんだ。お祝いするお店は聞いてたんだけどさ、誰が来るか聞かされてなかったの。私はてっきり、女性陣のメンバーでお祝いするのかなと思ってただけ

ど、まさかうっちーもおっくーもあつぽんも来てくれるなんて」

雅也「サプライズ大成功ってやつだね」

雪奈「あつぽん、わざわざ京都から？」

篤志「そりゃ、植野さんのお祝いだもん、駆けつけますよ」

裕司「俺は今日休みだから、日中のんびりしてたけど、うっちーなんて仕事帰りで、ついさつきここに来たんだから」

雅也「危うく今日の主人公のゆきちゃんを差し置いて遅刻するところだったわ」

雪奈「私のお祝いに遅刻なんてありえないからね」

雅也「もちろんでございます」

雪奈「でも、みんな本当にありがとう。私の誕生日のために。あ、うっちーもこの間誕生日だったよね、おめでとう」

一同「おめでとうございます」

雅也「ありがとう。でも、今日の主人公はゆきちゃんですから。（と雪奈に）ゆきちゃ

ん、俺もおっくーもあつぽんも、普段からゆきちゃんを持ち上げる三人だけど、今日は誕生日だから、いつも以上にゆきちゃんを持ち上げて、おもてなしさせていただきます」

篤志・裕司「よろしくお願いします」

雪奈「（苦笑して）何の意気込みよ」

後輩「じゃあ、飲み物注文しましょうか」

篤志「（店員に）すいませーん」

N「ゆきちゃんの誕生日のサプライズは無しに大成功しました。サプライズというのは、お祝いする側もされる側も楽しい気持ちになることを改めて実感しました」

8 木内家・雅也の部屋（夜）

雅也が赤ペン片手に、印刷した原稿データを細かくチェックしている。

N「ゆきちゃんの誕生日の余韻に浸る間もなく、僕はようやくスポンサーの目処がついて創刊準備号としてこぎつけることので

きた『デイズ』の編集作業と校正確認作業に追われる日が続き始めました。表紙含めて全二十ページ分の写真や原稿などといった素材を集めて、デザイン作業をするのは思いのほか時間がかかる作業でした」

9 同場所（夜）

雅也がパソコンで編集作業をしている。
N 「そして、その編集作業は何日も続きました。表紙、広告枠、目次、巻頭特集、ショップコーナー、連載小説、料理コーナー、奥付と、二十ページの編集作業も十一月下旬に来るといよいよ大詰めとなり、何とか編集作業を終え、印刷会社へのデータ入稿を済ませることができました」

10 同・居間（一週間後）

雅也が昼ご飯を作っている。
N 「そして、一週間が経った十二月上旬のある日のこと……」

インターホンが鳴り、雅也が振り返る。

雅也「はい」

× × ×

段ボール箱を何箱も運んでくる雅也―

―一番上の箱をカッターナイフを使っ

て開ける。

海沿いの写真が表紙になったフリーペ

ーパー『デイズ』の束が入っている―

―安堵の笑みを浮かべる雅也。

N 「ついに、地元のフリーペーパー『デイズ』

の創刊準備号が完成。これからフリーペー

パーを通して地元と繋がり、地元を知って

いこうと思いいち始めました」

つづく